

【論文】

『太平広記』訳注（稿）
——巻四百一「宝」部金下（上）——

高西成介

（二〇二二年九月二十六日受付、二〇二二年十二月十四日受理）

Translation with notes of *Taiping guangji* 太平廣記,
vol. 401, Bao-bu 寶部, Jin 金, xia 下, (part 1)

Seisuke TAKANISHI

(Received : September 26, 2022, Accepted : December 14, 2022)

要 旨

北宋初期に編纂された『太平広記』五百巻は、中国の小説研究や文化研究において大変重要な資料である。また、『太平広記』所収の話は、日本の説話文学などにも影響を与えており、日本文学研究においても重要な資料であるといえる。本稿は、こつした『太平広記』中での「金」をめぐる話を集めた巻四百一「宝」部下に訳注を加えたものである。

Abstract

Taiping guangji 太平廣記, containing 500 volumes, was compiled during the early Northern Song Dynasty. These volumes are very important for the study of Chinese tales, and cultures, etc.

This paper is a translation with notes of *Taiping guangji* 太平廣記, vol.401, Bao-bu 寶部, Jin 金, xia 下, (part 1)

キーワード
太平広記・「宝」部・訳注

(一)

Key words:

Taiping guangji, Bao-bu, translation with notes

所属・学位
本学文化学部教授 修士（文学）

Academic Appointment & Degree:
Professor, Department of Cultural Studies, University of Kochi
(Master of Literature)

はじめに

筆者は、以前『太平広記』巻四百「宝」部金上について、訳注(稿)を本誌にて三回に分けて発表した。(書誌は以下の通り)

・『太平広記』訳注(稿)——巻四百「宝」部金上(上)——高知県立大学紀要文化学部編第六一巻、二〇一二年三月。

・『太平広記』訳注(稿)——巻四百「宝」部金上(中)——高知県立大学紀要文化学部編第六三巻、二〇一四年三月。

・『太平広記』訳注(稿)——巻四百「宝」部金上(下)——高知県立大学紀要文化学部編第六六巻、二〇一七年三月。

以来、ずいぶん間が空いてしまったが、本稿はその続稿であり、『太平広記』巻四百一「宝」部下に訳注を施すものである。

本稿を作成するにあたっては、底本として前稿までと同じく汪紹楹点校『太平広記』(中華書局、一九六一年新版)を使用した。ただし、一部断句を改めている。本文の括弧内は、中華書局本の原注である。ところで、『太平広記』のテキストに関しては、主要参考文献に挙げた張国風会校『太平広記会校』(北京燕山出版社)が、二〇一一年に新たに出版された。会校本は、多くの版本を参照し本文を整理した上で校記を付した大変な労作であるが、すべての文字の異同が記されているわけでは無く、また文字の選択や断句に疑問の残る箇所が散見される。^注そのため、本稿の訳注を作成するに当たっては、これまでと同様に従来から広く用いられてきた中華書局排印本を使用した次第である。

また、書式や字体に関しては、これまでと同様に太平広記研究会『太平広記』訳注(広島中国学会『中国学研究論集』第十号より連載)、太平広記読書会『太平広記』訳注(熊本大学『国語国文学研究』第四三号より連載)の方針に、基本的に従っている。

なお、作品番号に関しては、「宝部」の通し番号とするため、前稿から

引き継いでいる。

(注)

拙稿「富」「都市」をめぐる話と『続玄怪録』(『中国古典テキストとの対話』所収、研文出版、二〇一五年)注(26)などを参照。

〔底本〕

○李昉等編『太平広記』汪紹楹点校 中華書局 一九六一年新版

〔主要参考文献〕

参照したその他の『太平広記』の版本

○張国風会校『太平広記会校』北京燕山出版社 二〇一一年

○許自昌本『太平広記』国立公文書館内閣文庫蔵紅葉山文庫

○黄氏巾箱本『太平広記』筆記小説大観 江蘇広陵古籍刻印社 一九八三年

○四庫全書本『太平広記』上海古籍出版社景印 一九六九年

参照した白話訳

○陸昕・郭力弓・任徳山主編『白話太平広記』北京燕山出版社 一九九三年

三年

○周振甫主編『白話太平広記』中州古籍出版社 一九九三年

○高光・王小克・汪洋主編『文白対照全訳太平広記』天津古籍出版社 一九九四年

○丁玉琿等主編『白話太平広記』河北教育出版社 一九九五年

〔その他本稿で参照した主な文献〕

○李時人編校『全唐五代小説』陝西人民出版社 二〇一四年

○李劍国輯校『唐五代伝奇集』中華書局 二〇一五年

○袁閭琨・薛洪勳主編『唐宋伝奇総集』河南人民出版社、二〇〇一年
 ○蒲向明『玉堂閑話評注』中国社会出版社、二〇〇七年
 また、ここに挙げた以外の参考文献は、随時本文中で触れた。

21 「張珽」

咸通末年、張珽自徐之長安、至圃田東、時於大樹下。俄頃、有三書生繼來、環坐。珽因問之。一書生曰、「我李特也。」一曰、「我王象之也。」一曰、「我黃真也。」皆曰、「我三人俱自汴水來。欲一遊龍門山耳。」乃共閑論。其王象之曰、「我去年遊龍門山、經於是。路北二二里、有一子、亦儒流也。命我於家再宿而回。可同一謁之。」珽因亦同行。

至路北二二里、果見一宅、甚荒毀。既扣門、有一子儒服、自内而出。見象之頗喜、問象之曰、「彼三人者何人哉。」象之曰、「張珽秀才也。李特、黃真、即我同郷之書生也。」其儒服子乃竝揖入。升堂設酒饌、其所設甚陳故。儒服子謂象之曰、「黃家弟兄將大也。」象之曰、「若皇上脩德好生、守帝王之道、下念黎庶、雖諸黃齒長、又將若何。」黃真遽起曰、「今日良會、正可盡歡。諸君何至亟預(預原作頂、據明鈔本改)人家事、波及我孫耶。」珽性素剛決、因大疑其俱非人也。乃問之曰、「我偶與二三子會於一樹下、又攜我至此。適見高論、我實疑之。黃家弟兄、竟是誰也。且君輩人也。非人也。我平生性不畏懼、但實言之。」象之笑曰、「黃氏將亂東夏、弟兄三人也。我三人皆精也。儒服子即鬼也。」珽乃問曰、「是何物之精也。是何鬼也。」象之曰、「我玉精也。黃真即金精也。李特即枯樹精也。儒服子即是二十年前死者鄭適秀才也。我昔自此自化精。又去年復遇鄭適、今詣之。君是生人、當怯我輩、既君不怯。故聊得從容耳。」珽又問曰、「鄭秀才既與我同科、奚不語耶。」鄭適曰、「某適思得(某適思得原作乃命筆寫、據明鈔本改)詩一首以贈。」詩曰、

昔爲陰風嘯月人
 今是陰風嘯月身
 塚壞路邊陰嘯罷
 安知今日又勞神

珽覽詩愴然、歎曰、「人之死也、反不及物。物猶化精、人不復化。」象之輩三人、皆聞此歎、怒而出、適亦不留。

珽乃拂衣、及至門外廻顧、已見一壞塚。因逐三精、以所佩劍擊之。金玉(玉原作盃、據明鈔本改)精皆中劍而踏、唯枯樹精走疾、追擊不及、遂廻。反見一故玉帶及一金杯在路傍、珽拾得之。長安貨之、了無別異焉矣。(出『瀟湘録』)

【書き下し文】

咸通の末年、張珽徐より長安に之き、圃田の東に至り、時に大樹の下に於いてす。俄頃、三書生の繼いで來たる有り、環坐す。珽因りて之に問ふ。一書生曰はく、「我は李特なり」と。一に曰はく、「我は王象之なり」と。一に曰はく、「我は黃真なり」と。皆な曰はく、「我々三人は俱に汴水自り來たる。一たび龍門山に遊ばんと欲するのみ」と。乃ち共に閑論す。其れ王象之曰はく、「我去年竜門山に遊ぶに、是を經たり。路北二二里に、一子有り、亦た儒流なり。我に命じて家に再宿せしめて回る。同に一たび之に謁すべし」と。珽因りて亦た同に行く。

路北二二里に至り、果たして一宅を見るに、甚だ荒毀なり。既に門を叩くに、一子の儒服にして、内より出づる有り。象之を見るに頗る喜び、象之に問ひて曰はく、「彼の三人の者は何人なるか」と。象之曰はく、「張珽は秀才なり。李特、黃真は、即ち我が同郷の書生なり」と。其の儒服子乃ち並びに揖して入る。堂に升り酒饌を設くるに、其の設くる所は甚だ陳故なり。儒服子象之に謂ひて曰はく、「黃家の弟兄將に大なら

んとするなり」と。象之曰はく、「若し皇上徳を脩め生を好み、帝王の道を守り、下に黎庶を念へば、諸黄の齒長ずと雖も、又た將に若何せん」と。黄真 遽かに起ちて曰はく、「今日の良会、正に歎を尽くすべし。諸君何ぞ亟々人の家の事に預かり、我が孫に波及するに至るや」と。斑性は素より剛決、因りて大いに其の俱に人に非ざるを疑ふなり。乃ち之に問ひて曰はく、「我は偶々二三子と一樹の下に会ひ、又た我を携へて此に至る。適に高論を見るに、我は實に之を疑ふ。黄家の弟兄、竟に是れ誰ぞや。且つ君輩は人なるや。人に非ずや。我は平生より性 畏懼せず、但だ實に之を言へ」と。象之笑ひて曰はく、「黄氏は將に東夏を乱さんとする、弟兄三人なり。我々三人は皆な精なり。儒服子は即ち鬼なり」と。斑乃ち問ひて曰はく、「是れ何の物の精なるか。是れ何の鬼なるか」と。象之曰はく、「我は玉の精なり。黄真は即ち金の精なり。李特は即ち枯樹の精なり。儒服子は即ち是れ二十年前の死者鄭適秀才なり。我は昔此より自ら精と化す。又た去年復た鄭適に遇ひ、今之に詣る。君は是れ生人にして、当に我が輩を怯るべきも、既に君は怯れず。故に聊か従容を得たるのみ」と。斑又た問ひて曰はく、「鄭秀才既に我と同科なり、奚ぞ語らざるや」と。鄭適曰はく、「某適に思ひて詩一首を得たり以て贈らん」と。詩に曰はく、

昔爲唵風嘯月人 昔は唵風嘯月の人爲るも

今是唵風嘯月身 今は是れ唵風嘯月の身なり

塚壞路邊唵嘯罷 塚壞れ路邊唵嘯罷む

安知今日又勞神 安くんぞ知らん今日又た神を勞せんとは

斑詩を覽て愴然として、歎じて曰はく、「人の死するや、反つて物に及ばず。物すら猶ほ精に化すも、人復た化さず」と。象之輩三人、皆な此の歎きを聞き、怒りて出で、適も亦た留まらず。

斑乃ち衣を拂ひ、門外に至り廻顧するに及び、已に一壞塚を見る。因

りて三精を逐ひ、佩ぶる所の劍を以て之を撃つ。金、玉の精は皆な劍に中りて踏れ、唯だ枯樹の精のみ走ること疾く、追撃するも及ばず、遂に廻る。反りて一故玉帯及び一金杯の路傍に在るを見、斑拾ひて之を得たり。長安に之を貨るも、了に別に異なる無し。

【語釈】

○咸通 唐の第十七代皇帝懿宗(在位は八六〇〜八七三)の年号。八六〇年〜八七四年。 ○張斑 未詳。 ○徐 徐州のこと。現在の江蘇省徐州市一帯。 ○圃田 大きな沢の名。圃田沢。今の河南省鄭州市中牟県付近にあった。『爾雅』積地に、「鄭有圃田(鄭に圃田有り)」とあり、郭璞注に「今滎陽中牟縣西、圃田澤是也(今の滎陽中牟県の西、圃田沢は是なり)」とある。また、『周礼』夏官・職方士に「河南曰豫州、其山鎮曰華山、其澤藪曰圃田(河南を予州と曰ひ、其の山鎮を華山と曰ひ、其の沢藪を圃田と曰ふ)」とある。「李潯」(『太平広記』卷三五一引「劇談録」)にも、「咸通中、中牟尉李潯、寓居圃田別墅(咸通中、中牟尉の李潯、圃田の別墅に寓居す)」と見える。 ○時於大樹下 「時」の字、「唐五代伝奇集」は「憩」に改めている。 ○環坐 車座に座る。「哥舒翰」(『太平広記』卷三五六引「通幽録」)に、「糜割肢體、環坐共食之(肢體を糜割し、環坐して共に之を食らふ)」とある。 ○汴水 隋の煬帝が完成させた「通濟渠」のこと。黄河から汴州、宋州を経て、淮河に注ぐ。また汴河ともいう。 ○龍門山 洛陽の南にある山の名。竜門石窟で知られる。伊水の兩岸にそびえる西山と東山の両山を指し、伊闕山ともいう。 ○閑論 無駄話をする事。あまり用例の見えない語である。

○陳故 ふるめかしいさまをいう。『南史』卷十一「后妃上」齊文安王皇后伝に、「太子爲宮人製新麗衣裳及首飾、而后牀帷陳故、古舊釵鐻十餘枚(太子宮人の爲に新たに麗しき衣裳及び首飾を製る、而れども後の牀帷

は陳故にして、古旧ふるき釵さい鏡か十余枚あるのみ」とある。○黎庶 多くの民衆。○波及我孫耶 わが孫のことにまで(話が)及ぶのか。先に儒服子が象之に言った「黄家の弟兄」は、この黄真の孫ということになる。一方、会校本は陳本に抛り「孫」を「等」に改める。これだと、「我等われらに波及するに至るや」となり、黄真が「黄家の弟兄」の一員となる。『唐五代伝奇集』も同様に字を改める。また会校本、『唐五代伝奇集』ともに、「明抄本は「波將及我矣」に作る」と注している。いまとりあえず底本に従って解釈しておく。○預 関わる。口を出す。『世説新語』「汰侈」1に、「大將軍曰、自殺伊家人、何預卿事(大將軍曰く、自ら伊の家人を殺す、何ぞ卿が事に預らん、と)」とある。○黃氏將亂東夏、弟兄三人也 東華は中国の東部。ここでは、中原をいうか。『尚書』周書・微子之命に、「上帝時歆、下民祗協。庸建爾于上公、尹茲東夏(上帝は時れ歆け、下民は祗つし協かなふ。庸もつ爾なんぢをじやう上じやう公こうに建たて、茲こゝの東夏を尹をさめしむ)」とあり、その孔安国伝に「正此東方華夏之國。宋在京師東(正にこれ東方華夏の國なり。宋は京師の東に在り)」と見える。黄氏は中原を乱そうとする、三人の兄弟のことだ、の意。黄氏は黄巢のことで、ここでは黄巢の乱が意識されているのであろう。黄巢が山東で活動していた王仙之一党に呼応して、一族あげて武装蜂起したのは、乾符二(八七五)年のことであつた。この話は咸通末年、黄巢蜂起の一、二年前の出来事とされており、黄巢の乱が起きることが暗示されているのである。また、「東夏」の二字、会校本は沈本に抛り「華夏」に改める。○儒服子 儒者の服装をした者。物が化した三人の精と、生前は儒者であつた鄭適は、服装そのものが異なっているのである。○我昔 この下に、会校本は沈本に抛り「日」の字を補う。○同科 同類、仲間。ここでは、鄭秀才と張珽は人間として同類であり、他の三人の物の精とは異なることをいう。「張生」(『太平広記』卷三二〇引『纂異記』)に、「帝曰、孔聖人也。朕知久矣。

孟是何人、得與孔同科而語(帝曰はく、孔は聖人なり。朕知ること久し。孟は是れ何人ぞ、孔と同科にして語るを得んや、と)」とある。○昔爲陰風嘯月人、今是陰風嘯月身 昔は風を詠い月を詠じる人間であつたが、今は風を詠い月を詠じる身となつてしまつた。「陰」は「吟」に通じ、詠うこと。「嘯」も同じく詩歌を詠うこと。「身」は、ここでは人と対で用いられていることから、幽鬼の身体、魂の意で用いられていると解釈した。会校本、『唐五代伝奇集』によれば、陳本は「魂」に作る。『唐五代伝奇集』はこのことについて、「按、依『広韻』、「身」属「真」韻、「魂」属「魂」韻、此詩押「真」韻」と述べ、押韻の関係で「魂」ではなく「身」が用いられていることを指摘する。○安知今日又勞神 「安」字、会校本は沈本等に抛り、「豈」の字に改める。「勞神」は、心を疲れさせる。司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)に、「若夫終日馳騁、勞神苦形、罷車馬之用、抗士卒之精、費府庫之財、而無德厚之恩、務在獨樂、不顧衆庶、忘國家之政、貪雉兔之獲、則仁者不繇也(夫の終日馳騁し、神を勞し形を苦しめ、車馬の用を罷し、士卒の精を抗ひ、府庫の財を費やし、徳厚の恩無く、務めて獨樂に在りて、衆庶を顧みず、國家の政を忘れ、雉兔の獲を貪るが若きは、則ち仁者は繇らざるなり)」とある。また、「嵩山老僧」(『太平広記』卷四四三引『瀟湘録』)には、老僧の幼い弟子(正体は鹿)が詠んだ詩に、「我本長生深山内、更何入他不二門。爭如訪取舊時伴、休更朝夕勞神魂(我は本と深山の内に長生せんとするも、更に何ぞ他の不二門に入らんや。争でか訪ねて旧時の伴を取るに如かん、更に朝夕神魂を勞するを休めん)」とある。○愴然 うちひしがれるさま。○拂衣 衣をはらう。服装を整えること。○反見一故玉帶 「反」は、戻ってくることに、「故」は古いことをいう。会校本は、沈本等に抛り「乃見一白玉帶」に改める。○珽拾得之 「之」の字、会校本は沈本により「至」に改め、下に続けて「珽拾得、至長安貨之(珽拾ひ得て、長安

に至りて之を賃るも」と読む。

【現代語訳】

咸通年間(八六〇〜八七四)の末に、張珽は徐州から長安に赴き、大きな田んぼの東を通りかかり、大樹の下で一休みした。しばらくして、三人の書生が相次いでやって来て、車座に座った。珽はそこで彼らに問うたところ、一人の書生は「私は李特です」と言い、一人は「私は王象之です」と言い、一人は「私は黄真です」と言った。皆が言った、「我ら三人は一緒に汗水からやって来た。ちよつと龍門で遊びたいと思ったものでね」と。そこでみなでおしゃべりをした。王象之が言った、「私は去年龍門に遊んだが、その時にもここを通りかかった。路の北、一、二里行ったところに、ある人物がいて、彼もまた儒者であった。私は彼に言われて二晩家に泊まり、そうして戻ってきたのだ。一緒にまた彼に会いに行こう」と。珽はそこでまた一緒にいて行つた。

路の北、一、二里行つたところ、一軒の家があるのを見たが、たいそう荒れ果てていた。すぐに門を叩くと、一人の儒服を着た人物が、中から出てきた。象之を見てたいそう喜び、象之にたずねて言った、「あの三人は誰だい」と。象之は言った、「張珽は秀才だ。李特と黄真はわたしの同郷の書生だよ」と。その儒服の男は一人一人に会釈をして中に入った。座敷にあげりごちそうが並べられたが、その食器はたいそう古いものであった。儒服のものは象之に言った、「黄家の兄弟はだいぶ大きくなつたな」と。象之は言った、「もし皇帝が徳をおさめ、命あるものを大切に、帝王の道を守り、下に庶民のことを思っているとすれば、黄一族が歳を重ねたとしてもどうしようもあるまい」と。黄真はすぐに立ち上がつて言った、「今日の良き宴では喜びを尽くすべきです。みなさんはどうしてしばしば人の家のために口をはさみ、わが孫のことにまで及ぶので

しようか」と。珽はもとより性格は豪胆で、彼らはみな人ではないのではないかと大いに疑つた。そこで彼に尋ねて、「わたしはたまたまみなさんと樹の下で出会い、また私をつれてここまでやって来られました。いまみなさんのお話を見ますに、わたしは確かに疑いを持っています。黄家の弟兄とは、いったい誰なのでしょう。またあなたたちは人間なのでしょうか。それとも人間ではないのでしょうか。私は普段から怖がらない性格です。本当のことをおっしゃってください」と言った。象之は笑つて言った、「黄氏とは中原を乱そうとする三人の兄弟のことです。私たち三人は皆な物の精なのです。儒服の者は幽鬼です」と。珽は尋ねて言った、「こちらは何の精のですか。こちらは何の幽鬼のですか」と。象之は言った、「私は玉の精です。黄真は金の精です。李特は枯樹の精です。儒服の者は二十年前に死んだ鄭適秀才です。私は昔ここで物の精となりました。また昨年鄭適に会つたので、今日もここに訪ねてきたのです。あなたは生きた人間で、当然わたしたちを怖がるはずなのですが、あなたは怖がってはいません。だからしばらくの間ゆつくりとお話することができました」と。珽はまた尋ねた、「鄭秀才はわたしと同じ人間ですので、どうしてお話しにならないのですか」と。鄭適は言った、「私はたつた今詩一首を得たのであなたに贈りましょう」と。詩には、

昔は風を歌い月を詠ずる(生身の)人間であつたが
今は風を歌い月を詠ずる身(幽鬼)となつてしまった
墓が壊れ路のかたわらの吟詠が止む

どうしてわからないのか今日(おまえたちが)また幽鬼となつた私の心を苦しめていることを

珽は詩を見てうちひしがれて歎いて言った、「人が死ぬとかえつて物には及ばないのだな。物ですら精に化するというのに、人は何にも化せないとは」と。象之ら三人はみなこの嘆きを聞き、怒つて出て行つたが、

適もまたそこには留まらなかつた。

斑は衣を整え、門の外に至つて振り返つてみると、一つの壊れたお墓を見るだけであつた。そこで三人の物の精をおいかけて、身に付けていた剣で彼らを撃ちつけた。金と玉の精は二人とも剣に当たつて倒れたが、ただ枯樹の精だけは走るのがはやく、追いかけていったが追いつかず、引き返した。戻つてくると一つの古い玉の帯と一つの金杯が道ばたに落ちているのを見たが、斑は拾つてこれを手に入れた。長安でこれを売つたが、別にかわつたことは起こらなかつた。

【補説】

〈器物の怪と諷刺〉本話は、玉や金、枯れ木の妖怪と人間が出会い、幽鬼の家を訪問する話である。玉や金、枯れ木といったモノが妖怪化することからすれば、この話は「器物の怪」を語つた話の一つであると考えられる。とはいえ、本話は、例えば07「何文」で語られたような、六朝時代の素朴な怪異を語る話とは明らかに異なっている。

唐代に入ると、元無有なる人物が旅の途中に空き家に泊まつた際に、古い杵・灯台・水桶・壊れたなべが人に変化し、聯句をするのに出くわしたことを語る「元無有」(『太平広記』卷三六九引『玄怪録』)に代表される作品群が現れる。「元無有(元有ること無し)」という名前そのものがこの話の虚構性を暗示し、その作品の中で詠われる詩歌はそれぞれの正体を暗示しつつユーモアを含んだものとなつており、作品全体として諧謔性を持つものとなつている。また、「元無有」がいわゆる「器物の怪」であるのに対し、「動物が人に変化」する話も存在する。その代表的な作品が、成自虚なる人物が雪に降られ一夜の宿を乞うたところ、その家に駱駝・驢馬・鶏・二匹の針鼠といった動物が人に変化して集い、身の上話をして詩を吟じる「東陽夜怪録」(『太平広記』卷四九〇)である。こ

の話もまた、成自虚という語り手の名前から虚構性の強い作品であることは明らかであり、またその中で交わされる会話や詩は、パロディに満ちたユーモア溢れたものとなつている。つまり、唐代のこうした作品群は、六朝期の主眼であつた怪異を語ることから離れ、虚構性と諧謔性を追求したものになつていたのである。

ところが、本話には「元無有」や「東陽夜怪録」に見られる諧謔性は見られず、また六朝的な怪異性も見られない。器物の妖怪を退治し、玉帯と金杯を手に入れてはいるが、それが富へとつながる訳でもない。では、本話の特徴はどこにあるのだろうか。

本話で注目すべきは、黄巢なる金の精が黄巢に連なる存在として描かれ、黄巢の乱が暗示されることにある。王象之が、「若皇上脩德好生、守帝王之道、下念黎庶、雖諸黃齒長、又將若何(もし皇帝が徳をおさめ、命あるものを大切に、帝王の道を守り、下に庶民のことを思っているとすれば、黄一族が歳を重ねたとしてもどうしようもあるまい)」と語るのは、示唆的である。結果として黄巢の乱は起こつたのであり、それは、皇帝が徳を修めず命あるものを大切にせず、帝王の道を守らず庶民のことを思わなかつたからであることを、この言葉は示している。混乱を深める時代と社会への諷刺性こそが、本話の最大の特徴であろう。そして、これは本話を収める『瀟湘録』の特徴でもあると考えられる。「奴蒼壁」(『太平広記』卷三〇三出『瀟湘録』)は、李林甫の家奴であつた蒼壁の死と再生を語る話であるが、蒼壁は冥界で安祿山や玄宗、また彼以降の皇帝らに関する裁定を目撃する。冥官は、「可惜大唐世民、效力甚苦、方得天下治、到今日復亂也。雖嗣主復位、乃至于末、終不治也(惜しむ可し大唐の世民、力を効し甚だ苦しみ、方に天下の治まるを得たるも、今日に到りて復た乱るるなり。嗣主位に復すると雖も、乃ち末に至りて、終に治まらざるなり)」と語るのであるが、これもまた唐の滅亡の暗示であ

り、太宗の諱を直接表現することも含め諷刺性が強く、本話と同系統の話といえる。

なお、器物や動物が人に変ずる話は、『瀟湘録』には他にも、酒瓶が人に変ずる「姜修」や、鉄の鐘と亀の背骨が人に変じ儒仏道について議論する「王屋薪者」（ともに『太平広記』巻三七〇出『瀟湘録』）がある。

「人に化したモノや動物の妖怪」が集まって会話する一連の話柄に関しては、岡本不二明「異類たちの饗宴」（『唐宋伝奇戯劇考』汲古書院、二〇一一年所収）、川口秀樹「裴鏞『伝奇』の創作性について―審茵を中心として―」（『中国学研究論集』創刊号、一九九八年）などに詳しい。また、07「何文」【補説】も参照。

〔詩について〕本話で鄭適が詠んだ詩は、五言四句の形式ではあるが、一見してわかるように近体詩ではない。『広韻』に拠って平仄を示すと、次のようになる。

昔爲唵風嘯月人。 上平声十七「真」
今是唵風嘯月身。 上平声十七「真」
塚壞路邊唵嘯罷。 上声十二「蟹」
安知今日又勞神。 上平声十七「真」

一、二、四句末の「人」「身」「神」は、すべて上平声「真」韻で押韻されている。

なお、この詩は、『全唐詩』巻八百六十五鬼詩に「贈張斑」として収められている。その注には、「咸通末、斑過圃田、遇金杯、玉帶、枯樹三精。邀至一儒流家、云是二十年前死者鄭適秀才也。適命筆寫詩一首贈斑。斑回顧、惟見一壞冢（咸通の末、斑圃田を過ぎ、金杯、玉帶、枯樹の三精に遇ふ。邀きて一儒流の家に至り、云ふ是れ二十年前の死者鄭適秀才なり、と。適筆を命て詩一首を写し斑に贈る。斑回顧みるに、惟だ一壞冢を見るのみ）」とある。

〔『瀟湘録』〕『瀟湘録』の編者については、柳祥とする説（『新唐書』藝文志、『崇文総目』、李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』など）と、李隠とする説（洪邁『夷堅志』支癸序、『直齋書録解題』、李宗為『唐人伝奇』など）がある。柳祥に関しては、事迹は不詳。李隠も事迹は不詳であるが、『新唐書』藝文志には「咸通中人」と注記がある。詳しくは、李劍国『唐五代志怪伝奇叙録（増訂本）』（中華書局、二〇一七年）「瀟湘録」の条を参照。李劍国は『瀟湘録』に関して、

本書因言設事、假託神怪、而鍼砭現實。議論不乏警拔、亦莊亦諧、乃自具面貌。而其文辭清麗、善事形容、間用抒情筆墨、不失傳奇之體、足稱唐末佳制也（本書は言を列ね、神怪に仮託し、現実を批判するものである。議論は優れた点も少なくなく、厳しくもありユーモアもあり、面目を備えている。しかもその文章は清新で優美で、良く物事を形容し、抒情的な文章をまじえるも、伝奇の体は失われず、唐末の佳作と称するに足る）と述べている。

22「龔播」

龔播者、峡中雲安監鹽賈也。其初甚窮、以販鬻蔬果自業、結草廬於江邊居之。忽遇風雨之夕、天地陰黑。見江南有炬火、復聞人呼船求濟急。時已夜深、人皆息矣。播即獨棹小艇、涉風而濟之。至則執炬者仆地。視之即金人也。長四尺餘。播即載之以歸。於是遂富。經營販鬻、動獲厚利、不十餘年間、積財巨萬、竟爲三蜀大賈。（出『河東記』）

【書き下し文】

龔播は、峡中雲安監の塩賈なり。其の初め甚だ窮まりて、蔬果を販鬻ぐを以て自ら業とし、草廬を江辺に結びて之に居る。忽ち風雨の夕に遇

ひ、天地陰黒し。江南に炬火有るを見、復た人の船を呼びて済ひを求むること急なるを聞く。時已に夜深く、人皆な息む。播即ち独り小艇に棹さし、風を渉りて之を済ふ。至れば則ち炬を執る者地に仆る。之を視れば即ち金人なり。長さ四尺余なり。播即ち之を載せて以て帰る。是に於いて遂に富む。販鬻を経営し、動もすれば厚利を獲、十余年間ならずして、財巨万を積み、竟に三蜀の大賈と為れり。

【語釈】

○龔播 未詳。 ○峽中雲安監 「峽中」は、現在の長江三峡一帯。『資治通鑑』卷二百七十五後唐紀四明宗天成二年に、「西方鄴敗荆南水軍於峽中、復取夔、忠、萬三州（西方鄴、荆南の水軍を峽中に敗り、復た夔、忠、萬の三州を取る）」とある。「雲安」は、現在の重慶市雲用県。唐代は、山南東道の夔州に属した。『旧唐書』卷三十九地理二、『新唐書』卷四十四地理四参照。「監」は、その地に置かれた塩を扱う役所をいう。『資治通鑑』卷二百五十五唐紀七十一僖宗中和三年二月の条に、「江、淮貢賦皆爲賊所阻、百官無俸。雲安、清井路不通、民間乏鹽（江、淮の貢賦皆な賊の阻む所と爲り、百官俸無し。雲安、清井路通ぜず、民間塩乏し）」とあり、胡三省注に「雲安縣、漢胸臆地、後周改曰雲安縣、唐屬夔州、有鹽官。九域志、在州西一百三十三里。鹽監又在縣西三十里（雲安県、漢の胸臆の地、後周改めて雲安県と曰ふ、唐は夔州に属し、塩官有り。九域志に、州の西一百三十三里に在り。塩監又た県の西三十里に在り、と）」とある。さらに、『讀史方輿紀要』卷六十九夔州府雲陽縣雲安監城の条に、「劉昫曰、雲安多有鹽利、自漢以來皆置官司之。唐末置雲安監（劉昫曰はく、雲安多く塩利有り、漢より以來皆な官を置き之を司る、と。唐末雲安監を置く）」とある。 ○販鬻蔬果 「販」も「鬻」も「売る」の意。 ○復聞人呼船求濟急 「急」字の上に、会校本は沈本に拠り「甚

を補う。 ○涉風 風の中を進む。 ○長四尺餘 一尺は約三一センチメートル。 ○經營販鬻 商売を行う。 ○三蜀 蜀のこと。前漢のはじめ、蜀郡を分けて広漢郡を置き、武帝がまた分けて犍爲郡を置いた。これらを合わせて三蜀と呼ぶ。左思「蜀都賦」（『文選』卷四）には、「三蜀之豪、時來時往（三蜀の豪、時に來たり時に往く）」とあり、劉逵注に「三蜀、蜀郡、廣漢、犍爲也。本一蜀國。漢高祖分置廣漢、漢武帝分置犍爲（三蜀は、蜀郡、廣漢、犍爲なり。本は一蜀国なり。漢の高祖分ちて広漢を置き、漢の武帝分ちて犍爲を置く）」とある。 ○大賈 大商人。

【現代語訳】

龔播は峽中雲安監の塩商人であった。若いころはたいへん貧しく、野菜や果物を売ることが生業とし、草葺きの家を川のほとりにかまえて住んでいた。突然夕方に風雨にあい、天地が暗くなった。川の兩岸にたいまつのあるのが見え、また人が船を呼んで助けを求めること急なるを聞いた。すでに夜は更けていて、人々はみな寝静まっていた。播はすぐさま一人で小さな船を漕いで、風の中を進みこの人を助け出した。岸にたどり着けば、たいまつを持った者は地面に倒れ、みてみるとなんと金人であった。その長さは四尺あまりであった。播はすぐさま金人を船に乗せて家に帰った。こうして金持ちになったのである。商売を行い、いつも高い利益を得て、十年余りもしないあいだに、巨万の財産を手に入れ、ついには三蜀の大商人となったのである。

【補説】

〈金人獲得譚〉本話は、貧しい商人であった龔播が、ついには「三蜀の大賈」と称されるほどの富者になる由来が語られる致富譚である。彼が

富を手に入れる契機となったのは、嵐の日に船に乗った旅人を助けたことであつた。その後、その旅人は「金人」に変化し、富を翼播にもたすことになった。この説話の構造は、次のようになってゐる。

(1) 見知らぬもの（異人）が共同体の外部から訪ねてくる。

(2) 何かの契機で金人（銀人）に変わる。

(3) それを手に入れた家は、大金持ちになる。

こうした構造を持つ説話を、筆者はかつて「金人獲得譚」と称して、分析を加えたことがある。拙稿『唐代小説に見られる致富譚について』（『中國中世文學研究』四五・四六合併号所収、二〇〇四年）参照。また、「金人獲得譚」については、14「宇文進」【補説】でも、少し触れている。

さらに、仏教説話にしばしば見られる「仏像漂着譚」とも、本話はよく似ている。例えば、『法苑珠林』卷十三に、次のような話が見える。

（引用は、『法苑珠林校注』中華書局、二〇〇三年に拠る）

東晉周玘、字宣珮、義興陽羨人。晉平西將軍處之第二子也。位至吳興太守。家世奉佛、其女尤甚精進。家僮捕魚、忽見金光溢川、映流而上。當卽下網、得一金像。高三尺許、形相嚴明、浮水而住、牽排不動。馳往白玘。玘告女、乃以人船送女往迎。遙見喜、心禮而手挽、卽得上船。…以下略…（東晉の周玘、字は宣珮、義興陽羨の人なり。晉の平西將軍處の第二子なり。位は吳興太守に至る。家は世々仏を奉じ、其の女尤も甚だ精進す。家僮魚を捕らふるに、忽ち金光の川に溢れ、流れに映えて上るを見ゆ。當に卽ち網を下し、一金像を得んとす。高さ三尺許り、形相嚴明にして水に浮かびて住まり、牽きて排せんとするも動かず。馳せ往きて玘に白す。玘は女に告げ、乃ち人船を以て女を送り迎へに往かしむ。遙かに見て喜び、心より礼して手もて挽けば、卽ち船上ぐるを得たり。…以下略…）

本話のような「金人獲得譚」成立の背後には、こうした仏教説話の影響

も考えてみる必要がある。今後の課題としたい。

23 「宜春郡民」

宜春郡民章乙、其家以孝義聞、數世不分異、諸從同爨。所居別墅、有亭屋水竹。諸子弟皆好善積書、往來方士高僧儒生、賓客至者、皆延納之。忽一日晚際、有一婦人、年少端麗、被服靚粧、與一小青衣、詣門求寄宿。章氏諸婦、忻然近接、設酒饌、至夜深而罷。有一小子弟、以文自業。年少而敏俊。見此婦人有色、遂囑其乳媪、別灑掃一室、令其宿止。至深夜、章生潛身入室內、略不聞聲息。遂升榻就之、其婦人身體如冰。生大驚、命燭照之、乃是銀人兩頭、可重千百斤。一家驚喜、然恐其變化、卽以炬炭燃之、乃眞白金也。

其家至今巨富、群從子弟婦女、共五百餘口。每日三（日三原作三日、據明鈔本改）就食、聲鼓而升堂。江西郡内、富盛無比。（出『玉堂閑話』）

【訓読】

宜春郡の民章乙、其の家孝義を以て聞こえ、數世分異せず、諸從爨を同じうす。居る所の別墅は、亭屋水竹有り。諸子弟皆な善を好み書を積み、方士高僧儒生と往来し、賓客の至る者は、皆な延きて之を納る。忽ち一日の晩際、一婦人有り、年少くして端麗、被服靚粧し、一小青衣と、門に詣りて寄宿を求む。章氏の諸婦、忻然として近接し、酒饌を設け、夜の深きに至りて罷む。一小子弟有り、文を以て自ら業とす。年少くして敏俊なり。此の婦人を見て色有り、遂に其の乳媪に囑み、別に一室を灑掃し、其れをして宿せしむ。深夜に至りて、章生身を潜め室内に入るに、略声息を聞かず。遂に榻に升りて之に就くに、其の婦人の身体は氷の如し。生大いに驚き、燭を命じて之を照らさしむるに、乃ち是れ銀人の兩頭にして、重さ千百斤可りなり。一家驚喜し、然れども其

の変化するを恐れ、即ち炬炭を以て之を燃やせば、乃ち真に白金なり。其の家今に至るまで巨富あり、群従の子弟婦女は、あはせ共て五百余口なり。毎日三たび食に就き、鼓を声ならして堂に升る。江西の郡内、富盛比ぶるもの無し。

【語釈】○宜春 郡名。現在の江西省宜春市。○數世不分異 何代にもわたって別れて暮らすことはなかった。「分異」は別れて住むこと。『後漢書』卷八十一「李充伝」に、「家貧、兄弟六人同食遞衣。妻竊謂充曰、今貧居如此、難以久安。妾有私財、願思分異(家貧しく、兄弟六人食を同じくし衣を^{たが}通ひにす。妻竊かに充に謂ひて曰はく、今貧居此の如く、以て久しく安んずること難し。妾に私財有り、願はくは分異せんことを思ふ)」とある。○同爨 かまどを同じにする。「爨」は飯を炊くかまど。同居していることをいう。○別墅 本宅以外の庭園の中に建つ別荘。○有亭屋水竹 「亭屋」はあずまや。会校本は沈本に拠り「亭臺」に改める。「水竹」は池と竹林。○好善積書 善行を好み読書に励む。会校本は沈本に拠り「好善讀書」に改める。○延納 招き入れる。○端麗 美しいさま。○被服 服を着る。「古詩十九首」其十二(『文選』卷二十九)に、「被服羅裳衣、當戶理清曲(羅の裳衣を被服し、戸に^あ当たりて清曲を理む)」とある。会校本は沈本に拠り「炫服」に改める。これなら「華やかで美しい衣服」となる。○靚粧 おしろいをつけ、まゆずみを引く。化粧することをいう。司馬相如「上林賦」(『文選』卷八)に、「靚粧刻飾(靚粧し刻飾す)」とあり、郭璞注に「靚粧、粉白黛黒也。刻、刻畫髻鬢也(靚粧は、粉白くして黛黒きなり。刻は、刻みて髻鬢を^{あが}画くなり)」とある。○青衣 下女。青服は、身分の低い者が着る服装で、下婢もまた多く青衣を着た。また、志怪・伝奇の世界において、幽鬼など異界の存在はしばしば青衣を身につけている。○敏俊

「敏」も「俊」も聡いこと。『北史』卷二十六宋世景伝に、「道瓊少而敏俊、自太學博士轉京兆王愉法曹行參軍(道瓊少くして敏俊、太學博士より京兆王愉の法曹行參軍に転ず)」とある。○乳嫗 乳母。○灑掃 水をまいて洗い清め、ほうきで掃いて掃除をする。『礼記』内則に、「凡内外、雞初鳴、咸盥漱、衣服、斂枕簟、灑掃室堂及庭、布席、各從其事(凡そ内外、鶏初めて鳴けば、咸な盥漱し、服を衣、枕簟を斂め、室堂及び庭を灑掃し、席を布き、各々其の事に從ふ)」とある。○千百斤 五代時期の一斤は約六五〇グラム。「斤」字、底本は「觔」に作る。会校本は孫本、陳本に拠って改めている。いま会校本に従った。○白金 銀をいう。○群従 祖父を同じくする父方の親族。いとこ。○共 全部で、あわせて。「漁人」(『太平広記』卷三三引『原化記』)に、「唐貞元中、有漁人載小網、數船共十餘人、下網取魚、一無所獲(唐の貞元中、漁人の小網を載する有り、數船共て十餘人、網を下ろし魚を取るも、一として獲る所無し)」とある。○聲鼓 鼓を鳴らす。『魏書』卷一百八之一礼志一に、「我國家常聲鼓以集衆(我が國家常に鼓を声らして以て衆を集む)」とある。ここでは、鼓の音を合図に食事のために一族が集まることをいう。

【現代語訳】

宜春郡の民である章乙は、その家が孝義をもって世間に聞こえており、何代にもわたって分家することなく、一族みながおなじかまどの飯を食べて一緒に暮らしていた。住んでいた別宅には、あずまや、池、竹林があり、子弟たちはみな善行を積み読書に励み、方士や高僧、儒生らと交際し、訪ねてきた賓客はみな家に招き入れるのであった。

突然ある日のたそがれ時に、年若く美しい、服装もきちんとして化粧も美しい一人の婦人が、一人の若い青衣を着た下女と、門のところまで

やって来て宿を乞うた。章氏の婦人たちは、喜んで彼女らに近づき、酒や食事を設け、夜遅くになってお開きになった。一人の若者がいたが、文章をもってなりわいとしていた。年は若く聡明であった。この婦人を見て情欲をおぼえ、乳母に頼んで別に一室を掃除させ、彼女を宿泊させた。深夜になって、章生は身をひそめ、こっそりと部屋の中に入ったところ、少しも物音が聞こえなかった。ベッドにのぼって彼女に近づくと、その婦人は身体が氷のようであった。章生はたいそう驚き、あかりを命じて彼女を照らしてみると、二人の銀人がそこにいて、重さは千百斤ほどであった。一家の人々は驚き喜んだが、しかしそれがまた変化してしまうことを恐れて、すぐに熱した炭火でこれを燃やしたところ、それは本物の白金であった。

その家は今に至るまで巨万の富を得て、一族の子女はあわせて五百人あまり、毎日の三度の食事では、鼓が鳴らされたのを合図に堂にのぼるのであった。江西の郡内では、富み栄えること並ぶものなしであった。

【補説】

〈金人獲得譚〉本話は、孝義で聞こえる章一族の繁栄の契機を語る致富譚であり、その富の獲得の契機となるのが、「銀人」の獲得であった。本話もまた、前話22「龔播」と同様の「金人獲得譚」の一種といえる。「銀人」はまた、27「陳濬」（『太平広記』巻四〇一）でも語られる。「金人獲得譚」については、前話の補説も参照。

なお、孝義で聞こえた家に、その孝義に感じて富がもたらされるのであればよくある致富譚であるが、「銀人」を発見したのが情欲を覚え女性のベッドにもぐり込んだ若者である点は興味深い。

（続）

〔附記〕本稿は、科研費基盤研究（B）「『文選』の規範化に関する基礎的研究」（課題番号 19H01237）及び科研費基盤研究（C）「翻訳」「注釈」の創作性とフィクション生成をめぐる学際的・理論的研究」（課題番号 20K00527）による研究成果の一部である。